

第1講

社会学史①

●今日の学習

社会学はカバーする範囲が広く、進歩の速い学問です。体系らしい体系がなく、全体像をつかむのは容易ではありません(ほぼ不可能です)。しかし、学史を学ぶことで勉強の手がかりをつかむことができます。このテキストでは、本講と次の講で19世紀から20世紀末に至るまでの社会学史を概観します。特に本講の内容は公務員試験で頻出ですので、勉強して損はありません。まずは人名・用語に慣れていきましょう。

第1章

コント、スペンサー、マルクス

重要度 1 2 3 4 5

DVD 01 教養

Point

コント、スペンサーは公務員試験で頻出の人物です。著書名・理論名に注意を払うとともに、理論の内容や考え方の特徴にも注意しながら勉強してください。マルクスについては、この講で触れる内容よりも、**第3講・第4講**で学ぶ具体的な理論のほうが頻出です。ここでは、後の講をスムーズに学ぶための基礎固めをしておきましょう。

第1節 最初期の社会学

社会学は、19世紀の半ばに生まれた。最初期の社会学を支えた代表的な社会学者が**コント**と**スペンサー**である。彼ら2人の思想には、次のような共通点がみられる。

- ① 18世紀に発展した啓蒙思想・近代合理主義を肯定的に評価していた(**科学主義**)
- ② 19世紀の産業革命を肯定的に評価していた(**産業主義**)

③ 法学・政治学・経済学といった他の社会科学と同列の学問ではなく、さまざまな社会科学を総合した学問としての社会学を構想した(**総合社会学**)

ここからわかるように、**社会学は「近代」についての学問として生まれた。**

コントやスペンサーの社会学は、産業化に至る人間の歴史を大局的に考察するものであり、今日でいう「マクロ社会学」的な傾向が強くみられた。

コントやスペンサーらの産業主義イデオロギーを批判し、産業主義・資本主義に対して批判的な立場をとったのが**マルクス**である。マルクス自身は自らの学問体系を「社会学」とは呼ばなかったが、その思想は今日の社会学にきわめて大きな影響を与えている。

第2節 オーギュスト・コント

●1 コントの思想の特徴

オーギュスト・**コント**(1789～1857)は、フランス出身の哲学者である。世界ではじめて「社会学」という名称を用い、自分の思想を新しい学問として体系化しようとした。そのため、しばしば**社会学の創始者**といわれる。

コントは、フランスの思想家サン・シモン(1760～1825)の影響を受けており、前節に述べたとおり科学主義・産業主義思想に基づいている。主著として『**実証哲学講義**』(全6巻：1830～42)がある。

コントの生きた時代のフランスは、革命後の混乱した環境であった。コントは社会秩序の回復(再組織化)が急務であると考え、それに役立つ学問として社会学を構想した。もう少し具体的にいえば、社会生活を実証的に観察・把握することが社会秩序の回復の一助になると考え、その目的を果たすための学問として「社会学」を打ち立てようとしたのである。

コントは社会学の目的を、「予見するために見る」という言葉で表した。学問は社会の前進のために役立つ実践的なものでなければならず、そのためには合理的・科学的なものでなければならない。したがってコントは、社会学を**実証主義にもとづく科学**として体系化しようとした。実証とは、実験や観察などを行い、確認された内容に基づいて結論を出す方法である。実証科学には数学・天文学・物理学・化学・生物学などがある。コントは社会学を、このような実証科学のひとつとして確立しようと考えていた。

● 2 社会静学と社会動学

コントは、社会学を「社会静学」と「社会動学」からなるものとして構想した。

(1) 社会静学

社会静学とは、「社会の秩序を考察する理論」である。

コントは社会を生物有機体(生物)になぞらえ、**社会有機体説**を提唱した。生物の身体の中には、さまざまな器官が独自の機能を担いながら存在している。人間の社会でも、さまざまな人間が独自の働きをしながら社会を形作っている。人間の行う分業(社会的分業)のあり方、人間の働きの専門分化、そして分業の全体的な統合のあり方を把握する学問として、コントは社会静学を構想した。この社会静学のアイディアは、のちの理論家に受け継がれ、「社会構造論」として発展していく。

(2) 社会動学

いっぽう**社会動学**とは、「社会の発展(進歩)について考察する理論」である。コントは自身の提案する社会動学理論として**三段階の法則**(社会は「軍事的→法律的→産業的」という過程を単線的にたどって発展する)を発表した。社会動学のアイディアは、のちに「社会変動論」として発展していった(第3講 第1章参照)。

● 3 コント社会学の限界

コントは実証主義を掲げてはいたが、自身の議論は形而上学(哲学)的段階にとどまり、実証的な研究を行うことができなかった。

第3節 ハーバート・スペンサー

● 1 社会有機体説

ハーバート・**スペンサー**(1820～1903・イギリス)は、コントと並び、草創期の社会学者として著名である。彼は「社会も生物と同じように進化する」という**社会進化論**を唱えた。

スペンサーの思想には、コントに類似している部分が多い。スペンサーも社会を有機体になぞらえ(**社会有機体説**)、社会学とは、社会有機体の起源や発達につ

いて研究する学問であると述べた。

スペンサーの思想の根本には、個人が自分の利益を追求することが、社会全体の利益につながるという功利主義的個人主義がみられる。そして、それぞれの人間が自分の能力を発揮する自由を得れば、個人の働きが相互に絡み合い、均衡を保って、完全社会の状態が生まれると考えた。スペンサーはこの完全社会の状態が、まさに有機体に似ていると考えたのである。

● 2 社会静学と社会動学

スペンサーもコントと同じように、社会学を「社会静学」と「社会動学」に分けた。

スペンサーの提案する社会静学とは、「社会の均衡がどのようにして達成されるかを研究する学問」である。前項で述べたような「完全社会の達成について研究する学問」が、彼のいう社会静学であった。

そのいっぽうで、彼は自身の提案する社会動学の理論として、人間社会が**軍事型社会**から**産業型社会**へと移行するという歴史理論を展開した(第3講 第1章参照)。

スペンサーは、生物学の「適者生存」の概念を社会学に応用し、産業化は社会の進化であると考えていた(産業主義)。そして、産業化の結果としてもたらされた**自由放任主義**(=レッセフェール)的な資本主義体制をも容認していた。産業化を肯定している点も、前出のコントの思想に類似している。

第4節 カール・マルクス

● 1 マルクスの業績

カール・**マルクス**(1818～1883・ドイツ)は哲学者であると同時に、現実の政治に強い興味をもつ実践家でもあった。彼は資本主義を解体し、新たな社会を作り上げることを夢見ていた。資本主義に対して批判的だった点が、同時代を生きた前出のスペンサーとは決定的に異なる。

マルクスはエンゲルスとともに『共産党宣言』を著し、継続して革命運動に参加した。マルクスの思想は彼の死後も**マルクス主義**として展開し、19世紀から20世紀にかけての多様な労働運動・革命運動の理論的支柱となった。社会主義国家の誕生のきっかけとなったのもマルクス主義である。

● 2 共産主義社会(ユートピア)への夢

資本主義解体後の社会としてマルクスが構想したのが、「コミュニオン(コミュニズムの社会)」である。マルクスのいうコミュニズム(共産主義)のイメージは明確である。共産主義社会とは、人間の共同性と全体性が実現する社会だという。

マルクスによると、資本主義の国家は疎外された共同体であり、その中では暴力的な階級支配が行われている。このような資本主義を廃止することで、階級の分化と支配を終焉させるべきだと彼は考えた。資本主義の終焉は、国家権力をはじめとするあらゆる権力・支配の消滅を意味する。そうすれば人間は、自分以外の何か(階級などの社会的な力)ではなく、自分の意志に基づいて生きていけるようになる。

マルクスのコミュニズムについての考え方は、実現を目指した社会計画というよりは、ユートピア思想であった。ユートピア思想とは、現実世界のどこかに理想郷を描く考え方である。

そして、マルクスはユートピアへといたる歴史の発展法則を、

原始共同体的社会→古代奴隷制社会→中世封建的社会
→近代資本主義社会→社会主義的社会

という図式で示した(第3講 第1章参照)。

第2章

重要度 1 2 3 4 5

デュルケム、ウェーバー、ジンメル

DVD 01

Point

デュルケム、ウェーバー、ジンメルは、前章で紹介したコント、スペンサーの思想を批判的に受け継ぎ、社会学の発展に貢献した人物です。3者3様の社会観・社会学観やそれに基づく諸理論は、いずれも公務員試験の頻出事項です。注意して勉強しましょう。

第1節 社会学の確立を目指して

コント、スペンサーの総合社会学は、構想は壮大であったが厳密性に欠け、ひとつの学問分野を名乗るには荒削りで未成熟なものであった。デュルケム、ウェーバー、ジンメルはそれぞれ先人の業績を学び、社会学を精緻化し、さらに発展させようと試みた。

彼らは「『社会』とは何であるか」を考え、「『社会学』のあり方」を考え、同時に独自の理論を打ち立てていった。

第2節 エミール・デュルケム

● 1 デュルケムの業績

社会学には、次のような根本的な問いがある。「社会とは個人の集合に過ぎないのか、それとも個人を超越した独自の存在なのか」という問いである。

エミール・デュルケム(1858～1917・フランス)は、基本的に後者の立場をとった。すなわち、社会は個人を超えた独自の存在であり、個人を拘束する実体であるとした。このような考え方を**社会実在論**という。

デュルケムは、社会は個人の心理的事実に還元されず、それ自体独自の論理をもち、個人に外在し、個人を拘束する**社会的事実**であると主張した。デュルケムのいう社会学とは、個人に還元できないこの社会的事実を研究する学問である。彼は社会的事実を事物のように観察すべきだと考えた。

このようなデュルケムの方法論的立場は**社会学主義**と呼ばれるが、後述するウェーバーなどと比較して**方法論的集合(全体)主義**と呼ばれることもある。

デュルケムの代表的な著作には、『**社会分業論**』『社会学的方法の規準』『**自殺論**』『**宗教生活の原初形態**』などがある。

● 2 社会分業論「機械的連帯から有機的連帯へ」

デュルケムは、社会における人々の協力体制(分業)に注目し、**機械的連帯**から**有機的連帯**へという、社会の変化の図式を提示した。この図式は、彼の代表的な著作『**社会分業論**』において示された。詳しくは、第3講 第1章で再度解説する。

(1) 機械的連帯による環節型社会

機械的連帯は、「類似による連帯」ともいわれる。たとえば農村において、人々は季節にあわせてみなで同じ作業に従事する。このように没個性的な人々の協力体制を機械的連帯という。

機械的連帯においては、社会のメンバーひとりひとりの個性の生かされる余地が少ない。そのため、機械的連帯によって成り立つ社会は、社会のどこをとっても類似した構造を示す。この様子を、環形動物(ミミズなど)の各節が類似していることになぞらえて、デュルケムは**環節型社会**と呼んだ。

(2) 有機的連帯による組織(型)社会

有機的連帯は、「差違または分業による連帯」ともいわれる。都市化の進んだ現代社会に目立つ、社会成員の強みを生かした分業体制である。

有機的連帯に基づく社会は、どこをみるかによって構造が異なる。この状態は、有機体(生物)の体内で、さまざまな組織(器官)がそれぞれの役割を果たしながら一つの生命をかたちづくっている様子に似ている。そのため、有機的連帯に基づく社会は**組織(型)社会**と呼ばれることがある。

(3) 機械的連帯から有機的連帯へ

デュルケムは、歴史の流れに「機械的連帯→有機的連帯」をあてはめ、社会は、機械的連帯中心の時代から、有機的連帯の目立つ時代へと進化すると指摘した。

彼は、有機的連帯のもとで、人々がときに私利追求に走り、無規制的な状態(アノミー)を生み出すことがあるとも述べた(第6講)。

● 3 宗教生活の原初形態

(1) 社会的事実としての宗教

デュルケムは、社会的分業を可能にする要因として**集合意識**(第3講 第1章)を挙げたが、集合意識のなかでもとりわけ、習慣や道徳的紐帯(結びつき)の重要性に着目した。そして、社会における個人間の道徳的紐帯がいかに構築されるかという問題に関心をもち、道徳的紐帯のあり方に影響を与える「宗教」に注目した。

著書『宗教生活の原初形態』において、デュルケムは宗教を**社会的事実**として研究対象とした。宗教を研究する際、デュルケムが注目したのはもっとも単純な「原始宗教」である。彼は、原始宗教には、あらゆる宗教が備えるべき特質が備わっており、しかも単純なだけに、その特質を把握しやすいと考えたのである。

デュルケムにとって宗教とは、人間同士を結合させる媒介物であり、道徳であり、連帯そのものであった。

(2) トーテミズム

デュルケムは、宗教の本質は「聖」と「俗」の2領域から構成されると考えた。この2領域は、「禁止(タブー)」によって厳しく隔てられている。

デュルケムが宗教の起源を求めて到達したのは、オーストラリアの先住民アボリジニの信仰するトーテミズムであった。「トーテミズム」とは、原始社会において、「氏族の神様を動物(トーテム)になぞらえ、それを崇拝すること」である。このトーテミズムをデュルケムは次のように解釈した。

一個の人間はやがて死ぬが、集団は永遠に存続する。この無力なる一個の人間から見た集団の普遍性に対して、崇拝の観念が生じる。そこで、集団のもつ「生命原理(永続性)」を崇拝しようとする観念が生じ、これがトーテミズムの基底となった、というのである。

つまり、トーテムは氏族社会の生命原理の表現であり、その意味で「神」とは社会の具体的な表現にほかならない。オーストラリアの未開社会でトーテミズムを信仰する人たちは、実は「個人を超越する力としての社会」を崇拝していたのだ、とデュルケムは考えた。

もっとも、オーストラリアのアボリジニの祖先崇拝をトーテミズムと呼べるかどうかについては、現代の人類学の見地をふまえれば異論もある。

第3節 マックス・ウェーバー

● 1 ウェーバーの方法論

マックス・ウェーバー(1864～1920・ドイツ)も前出のデュルケム同様、今なお社会学に巨大な影響を与え続けている社会学の泰斗である。ウェーバーが採用した社会学の方法論的立場には、のちの社会学に大きな影響を与えたものが多い。

(1) 方法論的個人主義

たとえばウェーバーは、一切の社会現象は、例外なく諸個人の行為に還元できると述べた。つまり、「社会とは個人の集合に過ぎない」という考え方であり、これは**社会名目論**といわれ、デュルケムの**社会实在論**と対比される。

またウェーバーは、諸個人の行為の動機を理解することが、社会学の任務であ

るとした。こうした彼の方法論は**方法論的個人主義**と呼ばれ、デュルケムの方法論的集合主義(社会学主義)と対比される。

(2) 価値自由

前項でウェーバーの社会・社会学についての考え方を説明したが、彼が示した「価値自由」という概念も、後世の社会学に大きな影響を与えた。

価値自由とは、「研究者が、自分の研究に無意識に影響している価値観を自覚し、そうした価値観の影響を脱しようと努めること」である(これは「価値中立」とは異なる)。

ウェーバーは、研究者がすべての価値観から解放されて、純粋に客観的(=価値中立)に物事を研究できるとは考えていなかった。研究活動も人間の行為のひとつである以上、その人の価値判断にかならず拘束される部分(価値拘束性)がある。したがって、研究者は自分の研究が中立的・客観的だと盲目的に信じるのではなく、自分自身の研究に知らず知らずに影響を与えている価値判断を自覚するよう努めなければならない。このような研究者の倫理を、ウェーバーは示したのである。

(3) 理念型

ウェーバー社会学においてもうひとつ重要なのは、「理念型」という概念である。

理念型とは、「研究者が自分の問題意識に従って現実から一定の諸要素を抽出し、それらを論理整合的に結びつけたもの」である。もっと簡単にいえば、「現実の社会現象を分析するために、研究者が作り出した一種の尺度」である。研究者は、実際に起こっている社会現象が、理念型とどのくらい違っているかをみることで、現実の社会現象を分析することができる。

ウェーバー自身が創った理念型として有名なのが、次に述べる「(社会的)行為の4類型」と、「支配の3類型」と呼ばれる概念である。

● 2 行為の4類型

ウェーバーは、人間の行為をその動機の観点から、①目的合理的行為、②価値合理的行為、③伝統的行為、④感情的行為、として類型化した。

① 目的合理的行為

目的合理的行為とは、「ある目的を達成するのに合理的な行為」である。すなわち、ある目的を達成するために、他者を含む外界の将来の状況を推測し、その

予測に基づいて目的を達成するために適切な手段を選択する。いわば、他者や周囲の状況を、目的達成の条件・手段として利用するような行為である。目的合理的行為の特徴は、手段と目的との間の因果関係が論理的に明確なことである。

② 価値合理的行為

価値合理的行為は、「ある価値に合理的な行為」である。つまり、倫理的・美的・宗教的といった一定の価値を重視し、結果を顧慮することなく自らが重視する価値に従って行う行為である。

③ 伝統的行為

伝統的行為とは、「『これまで行ってきたから』ということが最大の根拠となるような行為」である。習慣化した多くの日常的行為がこれにあたる。

④ 感情的行為

感情的行為とは、「行為者が情緒に突き動かされて行う行為」のことである。

以上の4類型のうち、前二者は「合理的行為」であり、後二者は「非合理的行為」である。ウェーバーのいう「合理性」とは、「つじつまがあうこと」と考えればよい。ウェーバーは①の目的合理的行為を「最も論理的に明晰なもの」とみなしており、それ以外の類型の特徴を、「目的合理的行為といかにかけ離れているか」によって捉えようとした。

● 3 支配の3類型

ウェーバーによれば「権力」とは、「ある社会関係の内部で、抵抗を排してまで自己の意思を貫徹するすべての可能性」と定義される。すなわち、「『相手の意志に逆らっても』、自分の意思を貫きとおして他者の行為を左右することを可能にする力」を権力という。ウェーバーにとって権力とは、国家権力のみならず、あらゆる社会的場面、相互行為の場面に存在するものであった。

いっぽうウェーバーは「支配」を、「特定の命令に対して挙示しうる一群の人々のもとで、服従を見出す可能性」と定義した。つまり、単なるむき出しの権力が「相手の意志に逆らっても、相手にいうことを聞かせること」を意味するのに対し、支配とは、「支配される側が進んで支配者の命令に従う状況」を意味している。すなわち、あらゆる支配とは「正当性」をもつものなのである。ウェーバーはこの支配の概念に注目し、被支配者が支配の正当性をどのように承認するかを考え、**支配の3類型**を示した。

①伝統的支配

伝統的支配とは、「古くから行われてきた伝統の神聖性と、それによって立つ特定の人に付与された権威の正当性についての信念にもとづく支配」である。例として「家父長制」などがあげられる。

②カリスマ的支配

カリスマ的支配とは、「ある人物の人格、天与の資質、呪術的能力、非日常的力などへの情緒的帰依による支配」である。例として「予言者・軍事的英雄による支配」があげられる。

③合法的支配

合法的支配とは、「成文化された秩序や、この秩序によって特定の人に付与された命令権による支配」である。例としては「官僚制」があげられる。

ウェーバーによれば、歴史的には**カリスマ的支配**がもっとも早い時期に出現した。カリスマ的支配が世襲化・永続化すると、**伝統的支配**へと変化していく。伝統的支配は、近代になって**合法的支配**にとって代わられることになる。合法的支配が発展すると、**官僚制**が出現することになる。

● 4 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

(1)資本主義を発展させたもの

ウェーバーの著作『**プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神**』は、資本主義の発展の要因を分析したものである。

ウェーバーの生きた19世紀のドイツでは、産業化の進展と同時に、カトリック、プロテスタントなど、いくつかの信仰が混在していた。そのなかで資本家、上層の熟練労働者、高度な専門的訓練を受けた労働者は、カトリックよりもプロテスタントを信仰していた。ウェーバーはこれに注目し、プロテスタントの信仰のあり方(プロテスタンティズム)と、資本主義の発展を可能にした精神のあり方に関係があるものと考察した。

(2)資本主義のエートス

ウェーバーは、「行為の意味の理解」を重視する**理解社会学**の立場から、近代資本主義の成立過程は、「資本主義的に利用しうる資金がどこから来たか」を調べるよりも、「資本主義の精神がどのように形成されたか」をみるほうが、よりよく理解できると考えた。

そこで、ウェーバーは「エートス」という概念に注目した。エートスとは、「人間の社会行動の行方を、その内側から規制する観念の束」である。ただし、エートスは自覚された倫理観ではなく、より無意識的な、人間の行為を内面から支える倫理意識である。

ウェーバーは、資本主義の成立には、資本主義の精神を形成する特定の倫理的規範、すなわち「資本主義のエートス」が関係していると考えた。資本主義の担い手の労働者・資本家に共通のエートスとは、「勤勉に働き利潤を追求すること自体が、価値ある人生の目的だ」というものである。そして、「自分の仕事に勤勉にいそしむことは、人生における義務である」という意識がみられた。ウェーバーはこれを「使命としての職業」、すなわち「天職観念」と呼んだ。そして、この天職観念の起源を、プロテスタントの一流派であるカルヴィン派の人々の宗教倫理(カルヴィニズム)に見出したのである。

カルヴィニズムは人々に、在家のまま禁欲に励み自分の信仰を証明する「世俗内禁欲」を奨励した。そして、自分の職業生活に絶えずいそしむことも、この世俗内禁欲に通じるものと考えられていた。このような教理を信じる者にとって、職業上の成功の結果得られる財産は救済の証しであり、利潤の追求は、神の意志に添うものである。よって、獲得された財貨は浪費されることなく蓄財され、資本として蓄積されることになった。

ウェーバーは、近代になってキリスト教の影響が衰退しても、こうしたエートスだけはプロテスタントの人々のなかに残り、資本主義の精神となったと論じた。

第4節 ゲオルク・ジンメル

● 1 形式社会学

社会を、個人間の相互作用としてみることは、現代社会学におけるひとつの有力な観点である。社会学の歴史においてそのような社会観を最初に提唱した人物が、ゲオルク・**ジンメル**(1858～1918・ドイツ)である。ジンメルは、社会学独自の研究対象は「心的相互作用の形式」であると述べ、**形式社会学**を提唱した。

心的相互作用の形式とは、家族・企業・宗教団体など、異なるさまざまな社会集団の中に共通して見られる、「相手のある行動の様式」である。たとえば「上下関係・競争・派閥形成・分業・模倣」などである。これに対して、他の学問分野が扱う「政治・法律・経済・宗教・芸術」などを**内容**と呼び、これらは**形式**を通じて実

現されるものだとジンメルは考えた。

人間は「社交・営利・援助・愛・攻撃・防御」といったさまざまな目的や衝動を原動力として互いに作用し合い、そのことに規定されて生きている。ジンメルは、社会という統一体は、個人諸要素間のこうした心的相互作用として捉えられると考へ、また、心的相互作用が、社会を社会として成立させていることを、**社会化**という言葉で表現した。

● 2 ジンメルの思想の特徴

ジンメルは、コント、スペンサーらがめざした、経済・政治・法といった社会諸領域を総合する学問としての**総合社会学**の考え方を批判し、「諸科学の全体をひとつの壺に投げ入れて、これに社会学という新しいレッテルを貼るだけでは何にもならない」と述べ、ひとつの**個別科学としての社会学**を構築すべきだと考へた。

また、ジンメルは、**社会名目論**と**社会实在論**の立場を、ともに批判した。社会現象により接近すれば個人がみえてくるし、離れてみれば個人は消え、「社会」という像が現れてくる。それゆえ、社会名目論と社会实在論の相違は、研究対象との距離のとり方の相違にすぎず、両者はともに「視点」であるにすぎないとした。

● 3 ジンメルの近代化論

ジンメルによると、原始社会は**社会圏**(個人が生活している範囲)の規模が小さく、個人はほぼ単一の集団の中に埋没して暮らしていた。しかし時代が進み、人々の認識が精密になっていくにつれて、個人は自立し個性を発達させる。ジンメルは、「**社会圏の拡大と交差**を通じて、このような変化が起こる」と述べた。

厳密にいうと、「社会圏」とは「ある共通な性質を分けもち、一定の輪郭をもった社会的相互作用を反復している人の範囲」を意味する。「社会圏の拡大」とは、その量的拡大と分化を意味する。社会圏の拡大・分化とともに、個人は単一の集団(社会)ではなく複数の集団(社会)に分属するようになる。このとき、個人は社会と社会の交点となり、自分の中で社会圏を交錯(交差)させるようになる。このことが、個人の自我意識や個性の発達を促すのだという。

第3章 マンハイム

重要度

1

2

3

DVD 01 教養

Point

マンハイムは、前章で学んだデュルケム、ウェーバー、ジンメルよりも少し後の時代に活躍した研究者です。先の3人より知名度・出題頻度は下がりますが、その思想や独自の研究視角には注目すべき点があります。青字部分を中心に、ポイントをおさえていきましょう。

● 1 知識社会学

カール・**マンハイム**(1893～1947)は、ハンガリーの首都ブダペストで生まれ、1911～15年にかけてドイツ、フランスに留学した。

マンハイムは、ジンメルの形式社会学を批判した。ジンメルのいう「形式」を自身の研究対象として重視せず、現実の社会と知識・イデオロギーの関連に注目し、**知識社会学**を展開した。知識社会学は、知識の内容そのものを積極的に研究対象とする点に特徴がある。

また、「すべての理論は客観的に自己展開するのではなく、その担い手のおかれている歴史的・社会的・文化的な諸条件の影響を受ける」と主張し、これを**存在拘束性**と呼んだ。存在拘束性は、**存在被拘束性**といわれることもある。

あらゆる知識や思考はその背後でそれらを支えている担い手の世界観と、その世界観を担っている集団的主体とに関係づけて捉えねばならない。これが知識社会学の基本的な視座である。

● 2 特殊的イデオロギーと普遍的イデオロギー

マンハイムは、**イデオロギー的思考**(現実を隠蔽する方向で存在を超越する思考)と**ユートピア的思考**(現実を追い越す方向で存在を超越する思考)の両者を批判的に論じた。

彼は特に「イデオロギー的思考」について深く思索し、**特殊的イデオロギー**と**普遍的イデオロギー**に区別して論じた。前者は、敵対者の思想や観念をイデオロギーとして捉え、自らの思想や観念をイデオロギーと考へない。いっぽう後者は、自分自身の観念形態も含め、一切の思想や観念をそれぞれの担い手の社会的存在位置と関連づけてイデオロギーとして捉える。

確認テスト

1 スпенサーの社会学に関する記述として、妥当なのはどれか。 実践

- 社会学を自然科学と同様の実証科学としなければならないとし、社会現象を総合的、統一的に考察する社会生理学の必要性を説いた。
- 社会の発展を人間の知識の発展段階と対応させてとらえ、社会は軍事的、法律的、産業的の3段階を経て発展していくとした。
- 社会学を一般社会学と特殊社会学とに区分し、前者は社会状態の原因とその特質について一般的に研究するもの、後者はそれを特殊的に研究するものとした。
- 社会有機体説の立場から、社会は進化の一般原理に従って集成と分化を生じ、不確定的な同質性から確定的な異質性へ変化するとした。
- 社会学は、社会的行為における行為者個人の動機を理解することを通じて、その経過と結果との因果連関を説明する科学であるとした。

正誤チェック

1回目 2回目 3回目

2 ジンメルの社会学に関する記述として、妥当なのはどれか。 実践

- 彼は、社会学は社会の包括的認識を目的とすべきであるとし、百科全書的な総合社会学を支持する立場から、対象を限定した個別科学としての社会学を批判した。
- 彼は、社会は社会を構成する諸個人に還元されるとする社会名目論を否定し、社会は諸個人の総和ではないとする社会实在論を主張した。
- 彼は、社会諸科学が社会化の内容を取り扱うのに対して、真に科学的な社会学は、社会化の形式と内容の両方を対象とすべきであるとした。
- 彼は、社会は諸個人の相互作用から成り立つものと考え、諸個人が相互に作用を及ぼしあう過程を心的相互作用とし、心的相互作用の様式を社会化の形式とよんだ。
- 彼は、社会の諸現象を、支配と服従、闘争と競争、模倣と分業などの行動形式として抽出し、巨視的な方法で分析した。

正誤チェック

1回目 2回目 3回目

マンハイムは、マルクスのイデオロギー論が、ブルジョアジーにのみイデオロギー性を認める特殊イデオロギーである点を批判し、敵対する相手方のみならず、自己の思想にもイデオロギー性を認め、これを相対化することが知識社会学の課題であるとした。

● 3 自由に浮遊するインテリゲンチヤ

マンハイムは普遍的イデオロギーの担い手を、「特定の階級に属さず、諸階級の間を自由に遍歴し、さまざまな立場に身をおくことができるインテリゲンチヤ（知識人）」、すなわち**自由に浮遊するインテリゲンチヤ**であるとした。

階級を超えて自由に浮遊するインテリゲンチヤは、歴史主義にもとづいた「**相関主義**」の実現に貢献する。相関主義とは、「一定の立場からの展望である認識の部分性を、相互に関連づけて総合的に評価することで、その時代に最も妥当性のある認識に到達することが可能である」という主張である。

マンハイムは、ある特定の時代・社会状況を共有する人々のあいだに、一定の真理が共有されうると考えた。したがって、自分自身の思考を他者に対して開かれたものにし、他者の思考に対して開かれた態度をとることで、自らの視野を広げていくことが必要だとした。こうした努力をするのが、「自由に浮遊するインテリゲンチヤ」である。彼・彼女らの活動によって、ある時代の歴史社会的な全体状況の「**社会学的時代診断学**」への道が開け、そこに科学としての政治学が成り立つとマンハイムは考えたのである。

● 4 自由のための社会計画

晩年のマンハイムは、現代社会のあり方に強い危機感をもつようになった。彼は『**変革期における人間と社会**』を著し、現代社会の特徴を**大衆社会**という用語で表現した。

マンハイムは、全体主義的な独裁体制にも、自由放任の自由主義体制にも懐疑的であり、どちらの体制にも与しない第3の道を求めた。そして、危機的状態にある現代社会を再建するための計画（「自由のための社会計画」）について議論した。彼はこの計画を描くにあたり、制度の変革はもちろんのこと、人間の変革である教育（特に大衆教育）の重要性にも着目していた（**第3講 第2章**参照）。

3 マンハイムに関する記述として、妥当なのはどれか。**実践**

- 1 フランクフルト学派の中心人物であり、その著「イデオロギーとユートピア」において知識社会学を提唱し、マルクス主義者の高い支持を得た。
- 2 社会心理とイデオロギーの関係を論じ、社会心理を不断にイデオロギーへと転化する過程としてとらえ、これを「イデオロギーの貯水池」とよんだ。
- 3 人間の知識や思想は、すべて社会的諸条件によって制約されるという「知識の存在拘束性」からイデオロギーをとらえた。
- 4 イデオロギーの相対化の程度に応じて、特殊的イデオロギーと普遍的イデオロギーとを区別し、マルクス主義は普遍的イデオロギーであるとした。
- 5 ナチス政権下のドイツからアメリカに亡命し、自由放任の立場から「自由のための計画」の実現を目指した。

正誤チェック

1回目 2回目 3回目

 MEMO 